バーバはいつも私と共にいる

シーター・ミシェル・シェイ

1970 年代中頃、私はニューヨーク市で女優として働いていました。演じている時のことですが、自然に湧き出るような無限のインスピレーションと英知の源に自分がつながっていると感じることが、何度かありました。創造性と真理の、このとてつもない泉にどうしたら戻れるかを知りたいと思っていました。ところが、最初のシッダ・ヨーガ・シャクティパート・インテンシヴでシャクティパートを受けた時、初めて、その場所が自分自身の内なる大いなる自己であり、マントラを通して、何度も何度もつながることができるのだと知ったのです。

1976 年の夏、キャッツキルのリゾート地にあるダビール・ホテルがバーバ・ムクターナンダの当座のアーシュラムとされ、バーバがそこに滞在することを知り、私はすぐさま、1 カ月の滞在を申し込みました。実際にバーバに対面し、シッダ・グルのそばで長い間サーダナーに没頭して生活するとはどういう感じなのか、体験したいと思ったのです。

ダビール・ホテルでのその 1 カ月間に、シッダ・ヨーガの教えと修行へのつながりは一層深まり、バーバからあふれ出る至福、特に彼の笑い声にある歓喜に魅了されました。日を追うごとに、バーバの愛の甘さを体験するにつれて、私の心を取り囲んでいた壁が柔らかくなり、解けていくのを感じました。バーバとのサッツァングやダルシャンを持てば持つほど、バーバのそばにもっといたいと切望するようになりました。

その切望は、バーバが米国訪問を終えてインドに戻る直前に行われたインテンシヴの間に強まりました。私は瞑想ホールの後ろの方に座っていて、私の前には何列もの瞑想している人々がいました。インテンシヴでは、バーバは歩き回り、クジャクの羽根をまとめた棒で探究者の頭のてっぺんをなでて、シャクティパートを伝授するのが常でした。バーバが部屋の中を動く音を

聞くことができました。私は目を開けて、バーバがホールにいる人々にシャクティパートを授けるのを見ながら、クジャクの羽根が擦れる軽いシュッという音を楽しみました。この貴重な贈り物を与えるというあふれんばかりの慈悲を目の当たりにして、バーバとのこの貴重な時間を延ばしたいという私の願いに火が付きました。どうすればずっとバーバのそばにい続けることができるのか、思いを巡らしました。

バーバはよく私たちに、グル、マントラ、そしてマントラを唱える者は、皆一つだと言っていました。恐らくこれが答えであろうと思い、私は目を閉じ、私の存在の中にあるすべてを込めて内側でマントラを繰り返すように自分に言いきかせました。オーム・ナマー・シヴァーヤ！ オーム・ナマー・シヴァーヤ！ 何度も何度も私はそれを繰り返しました。

突然、マントラが私のマインドから体の内側深くのどこかに沈潜しました。崇高な陶酔感が私の内側から湧き上がって来て、私の存在の内側にバーバの存在を感じました。その感情は、バーバが瞑想ホールの中に入ってくると私の中に起こりました。私の眼はぱっちりと開き、部屋の中にいるバーバを探し求めました。驚いたことに、彼は部屋のかなたから私を直接見ていたのです！ 愛に圧倒され、私は頭(こうべ)を垂れました。そして私が知らぬ間に、バーバは私の背後に立ち、自らの手で私の頭に触れていました。私が感じたグル、大いなる自己との内なる結び付きの強烈な感情は本物であると、彼が私のために確認してくれているのだと感じました。

私は、グル、マントラ、そしてマントラを唱える者は一つであるという教えの直接的な体験を与えてくれたことに対し、バーバに永遠に感謝します。現在で約 46 年に及ぶサーダナーを通して、私は自分がどこにいようと、何をしていようと、マントラを繰り返すことにより自分の注意を内側に向け、すべてのものの創造的な源泉、真の知識の大本――大いなる自己――につながることができることに気づいています。バーバ、ありがとうございます。

© 2023 SYDA Foundation®. 著作権所有。